OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	翻弄される昔男 : 『伊勢物語』の「色好み」「つれなし」と冠される女を視点として
Author(s)	木下, 美佳
Citation	語文. 2007, 88, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69087
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

翻弄される昔男

――『伊勢物語』の「色好み」「つれなし」と冠される女を視点として――

木下美佳

はじめに

在原業平には、「好色」というイメージがつきまとう。次に挙げる『今昔物語集』ですでに「好色」といわれることからも、そのイメージは古くから認識されているといえる。

今昔、右近ノ中将在原ノ業平ト云フ人有ケリ。極キ世ノ好色ニテ世ニ有ル女ノ形チ美ト聞クヲバ、宮仕人ヲモ人ノ娘ヲモ見残ス无ク、員ヲ尽シテ見ムト思ケルニ、（以下略）

（『今昔物語集』巻二十七「在原ノ業平ノ中将ノ女被噉鬼語」）

在原業平をモデルとしていると言われる『伊勢物語』において、男が「好色」、つまり「色好み」と言われる例は、次に挙げる五十八段・六十一段のわずか二例しか見出せない。まず、五十八段から見ていくこととする。

むかし、心つきて色ごのみなる男、長岡といふ所に家造りてをりけり。そこの隣なりける宮ばらに、こともなき女どもの、田舎なりければ田刈らむとて、この男のあるを見て、「いみじのすき者のしわざや」とて集りて入り来ければ、この男、にげて奥にかくれにければ、（以下略）

「心つきて」の語は、古来より難解な語で、諸説みられるが、ここでは石田穣二氏の説を借り[1]、「『心つく』は、『心（が）付く』で、もののよしあしがわかる、趣味を解するというほどの意味であろう。」と解しておく。昔男は「色好み」と書かれてはいるが、「心つきて」とともに用いられていることから、所謂「好色」だけの意味ではないことに気づかされる。また、女の口から「すき者」と評されていることも、その色好みが単なる「好色」ではないことの表れだと解せよう。

もう一例の六十一段についても、同様のことが見られる。

むかし、男、筑紫まで行きたりけるに、「これは色このむといふすきもの」と、簾のうちなる人のいひけるを聞きて、

その河を渡らむ人のいかでかは色になるてふことのなか

らむ
女、返し、
名にしおはばあだにぞあるべきたはれ島浪のぬれぎぬ着るといふなり

「色好み」の語は見られるものの、ここでも五十八段同様、昔男を「すきもの」だと女に語らせている。単に男を「色好み」と言うのではなく、「すきもの」だと評しているのである。男の「色好み」は否定されていないものの、「すきもの」と評することで、趣味を解す風流な人という側面の方が強調されていると解釈できよう。

地の文で「心つきて色好み」と記される五十八段の例、女の口から「すき者」という語とともに「色好み」と言われている両章段の例から、「好色」というイメージがつきまとう業平ではあるが、『伊勢物語』では、単純に「好色」として描かれていないと言える。[2] それだけでなく、『伊勢物語』において、「色好み」という語は、男に対してではなく、むしろ女に使われることの方が多い。[3]「色好み」と認識されている業平を、単純に「色好み」と記さない『伊勢物語』は、昔男をどのような人物として描こうとしているのであろうか。本稿では、そのような問題意識のもと、男にはあまり用いられない、「色好み」という語が冠される女との恋が描かれている章段を考察することとする。

一、色好みの女―二十五段の場合―

まず、『伊勢物語』に「色好み」の語が初めて登場する二十五段を見ていくこととする。

むかし、男ありけり。逢はじとも言はざりける女の、さすがなりけるがもとにいひやりける。

秋の野にささわけしあさの袖よりも逢はで寝る夜ぞひぢまさりける

色ごのみなる女、返し、

みるめなきわが身を浦としらねばやかれなで海人の足たゆく来る

この章段に見られる贈答歌は『古今集』（恋三・六二二・六二三）では、次のようにある。

題しらず　なりひらの朝臣

秋ののにささわけしあさの袖よりもあはでこしよぞひちまさりける

見るめなきわが身をうらとしらねばやかれなであまのあしたゆくくる　をののこまち

『伊勢物語』に見られるこの贈答歌は、『古今集』では隣り合っているだけで、贈答歌ではない。二十五段の贈答歌について、片桐洋一氏は「『古今集』に偶然並んで位置している二首を一つにまとめて一段の物語に仕立てあげたのである。[4]」と述べられてい

る。氏が指摘されるとおり、この章段は『古今集』でたまたま隣り合った業平と小町の歌が、贈答歌の形となって『伊勢物語』の中に取り込まれたと思われる。しかし、ここで注目すべきは、『古今集』と『伊勢物語』との間では、ゴシックで示したように、男の歌に違いが見られる点である。「寝る」「来し」という些細な違いではあるが、『古今集』が先行していると言われている章段であることを考えれば、ここは物語に合わせての改編だと指摘できよう。(5)

石田穣二氏が「贈答ということならば、むしろ『古今集』のほうが贈答にふさわしい。「逢はで来し夜」が、「かれなであまの脚たゆく来る」と響き合うのである。(6)」と述べられているように、「来し」から「寝る」へと変えられていることへの必然性は乏しいように感じられる。また、「秋の野にささわけしあさの袖よりも」という上の句は、後朝の別れの悲しみを想起させる。しかし、この章段において、男が思いを寄せている女は、「逢はじとも言はざりける女の、さすがなりける」と、逢わないとも言わないけれども、そうは言うものの、いざとなるとはやり逢わない女であった。女が男と逢っていないのであれば、男の歌の上の句を後朝と捉えて解釈することはできない。このように、二十五段のこの男の歌は、上の句と下の句のつながり、歌句の改編、この二点において、従来から問題が指摘されているところである。

二十五段のこの歌について、山本登朗氏は「上の句ではただ、いつか秋の野原で笹の葉を掻き分けて朝露に濡れたことを思い出し、下の句で、そのときの露よりも今の独り寝の涙の方がもっとひどく袖を濡らしているのだと詠嘆して、秋の野の露の美しいイメージに重ねながら自分の涙を強調している一首と考えるべきであろう。(7)」と、上の句と下の句の状況を分けて、独り寝の悲しみを訴える歌という解釈を示されている。山本氏のように上の句と下の句を分けて考えることも可能であろう。しかしながら、上の句と下の句を分けても、やはり歌句が改編される必然性への理由は乏しいように思われる。「来し」と「寝る」。どちらも女に逢えないことの悲しみを詠む歌に変わりはなく、この一語だけでは、解釈に大きな違いは見られない。では、なぜ二十五段では「来し」から「寝る」という歌句の改編が見られるのであろうか。

独り寝の悲しみを訴える男の歌に対し、女は、「海松藻の無い浦と知らないからか（私とは逢えないものと知らないからか）、絶えることなく海人が足をだるくして通ってくる」と、逢えないとも知らずに足しげく通う男のことを揶揄する返歌を詠んでいる。贈答歌という観点から二十五段を捉えてみると、女の返歌から、男は足しげく女の許へ通いつめていたことがうかがえる。また、後朝を想起させる「秋の野に笹わけし朝」という句も、上の句と下の句のつながりという点で問題視されてきたが、女の許へと通いつめる男の姿から、女に逢えずに帰ってくる朝のことを指していると思われる。これらのことを考え合わせれば、この二十五段の男の歌は、独り寝の悲しさを訴える歌なのではなく、女の許へ行ったものの逢えずに帰ってくる朝よりも、独り寝する夜の方が

悲しい、と言っているのであり、だからこそ、逢えなくとも結局は女の所へ行ってしまうという、女の許へ通いつめざるを得ない自分の心情を訴える歌であると解釈できよう。

男の相手は、逢わないとも言わないが、そうかといって逢うこともしない女である。このような曖昧な態度で男を虜にしている女である。そのような「色好み」の女に、男は翻弄されていると言えよう。翻弄されつつも、男は女の許へ通いつめざるを得ない。このような男の悲しみが二十五段には描かれているのである。

二十五段のように、「色好み」の女に翻弄される男の姿は、「色好み」の女が登場する他の三章段においても確認できる。以下、見ていくこととする。

二、色好みの女―二十八段・三十七段・四十二段―

逢うとも逢わないともはっきりしない、女の曖昧な態度に翻弄される男の姿を前節において確認した。「色好み」の女の虜となる男の姿は、四十二段にも描かれている。

むかし、男、色ごのみと知る知る、女をあひ言へりけり。されど憎くはたあらざりけり。しばしば行きけれど、なほいとうしろめたく、さりとて、行かではたえ有るまじかりけり。なほはたえ有らざりける仲なりければ、二日三日ばかり障ることありて、え行かでかくなむ。

出でて来し跡だにいまだ変らじを誰が通ひ路と今はなるらむ

もの疑わしさによめるなりけり。

「色好み」であると知りながらも、女と契ってしまった男の姿が描かれた章段である。

男は女が「色好み」であると知りつつも、しかしながら女のことを憎くは思っていなかった。しばしば女の許へ通ったけれども、男は「色好み」の女と分かっているからこそであろう、やはりたいそう不安な気持ちであった。不安ではあるが、そうかといって行かないでいることも出来なかった。四十二段には、「色好み」の女の魅力に取りつかれて、一時も離れたくないという男の心情がたて続けに描かれている。男はそれほどまでに、「色好み」の女の虜となっているのである。そして、そのような間柄の女の許へ、二、三日ほど差し障りがあって行くことができなかった時、男は自分が行けない間にも、他に男が通ってきているのではないかという、女を疑うような歌を贈る。自分が通えない間、女に対して猜疑心に満ちた気持ちでいることは、段末においても傍線部のようにはっきりと記されている。男がこのような歌を詠むのも、相手が昔男を惹きつけてやまない「色好み」の女だからこそと言えよう。

四十二段には、「色好み」の女と知りつつも、その女の虜となり、翻弄されている男の心情が細かに描かれていた。また、女の許へ行くことのできない間に、他に通う男がいるのではないか、と心配し、疑う姿も描かれていた。これらの描写から、「色好み」の女の虜となりつつも、不安や疑いに駆られるほど、女に翻弄さ

れる男の姿が確認できる。

四十二段ほどではないが、このように、「色好み」の女に対し、不安に思う男の心情は、三十七段にも描かれている。見てみよう。

むかし、男、色ごのみなりける女にあへりけり。うしろめたくや思ひけむ、

我ならで下紐とくな朝顔の夕かげ待たぬ花にはありとも

返し、

ふたりして結びし紐をひとりしてあひ見るまではとかじとぞ思ふ

「色好み」の女に逢った昔男は、女の気持ちを気がかりに思ったからか、女に対して、自分以外の男には下紐を解くな、たとえあなたが朝顔のような人であっても、と訴えている。女を「朝顔」という移ろいやすい花に喩え、自分が女と逢っていない間、他に男が通っているのではないかと心配する歌を詠んでいるのである。また、四十二段のように言葉多くは描かれていないが、傍線部のように、「色好み」の女に対し、男が不安を感じている言葉が挿入されている。このことにより、「色好み」の女の魅力に取りつかれ、不安に思う男の心情をうかがうことができる。「色好み」の女に対して他の男の影を心配する様子が詠み込まれている歌から、三十七段においても、恋の不安に襲われ、「色好み」の女に翻弄される男の姿が見てとれよう。

四十二段・三十七段では、他に通う男の存在を心配する昔男が描かれていた。しかし、「色好み」の女は、男が心配するような範囲を超えて、行動を起こしてしまうこともあったようである。二十八段を見ていくこととする。

むかし、色ごのみなりける女、出でていにければ、

などてかくあふごかたみになりにけむ水漏らさじと結びしものを

この章段の解釈については、山本氏が「「色好み」である以上、自然なりゆきとして、この女は、おそらくは心変わりをして、あるいは他に男を作って、この男のもとを去ったというのであろう。それを知ってか知らずか、この男は女を恨んだり憎んだりすることもなく、ただひたすらその事態をいぶかしみ、「会う期」が得難くなったことを嘆いているのみなのである。[8]」と述べられている通りであろう。女が出奔した事態をいぶかしみ、女に逢えなくなった悲しみの歌を詠む男は、まさに「色好み」の女に翻弄されていると言える。二十八段は、まるで詞書と歌だけのような短い章段ではある。が、そのような章段においても、『伊勢物語』では、「色好み」の女に翻弄され、その恋に悲しむ男の姿が描かれているのである。

以上、『伊勢物語』において「色好み」と冠される女の全用例を見てきた。逢えなくとも女の許へ通いつめてしまう男の悲しみを描いた二十五段、色好みの女と知りながら、その魅力に取りつかれて通い詰め、行くことが出来ない時は猜疑心にとりつかれてしまう男の姿を描く四十二段、色好みである女に対して不安を抱く男の姿が描かれた三十七段、女に出て行かれた嘆き、悲しみを

描いた二十八段。いずれも、「色好み」と冠された女に翻弄される男の姿が描かれていた。『伊勢物語』における「色好み」の女は、男を虜にする魅力的な女性であった。それ故に、昔男は「色好み」の女に翻弄され、恋に苦しむこととなるのである。

「色好み」の女が昔男を翻弄していたように、「色好み」という語は、恋を楽しむような人物という印象のある言葉である。『今昔物語集』において、「好色」といわれた業平ではあったが、『伊勢物語』において、「色好み」の女に翻弄される昔男からは、恋を楽しむなどという余裕は感じられない。それどころか、これらの章段からは、「好色」といわれるような姿は少しもうかがうことはできないのである。

男を惹きつけてやまないのは、「色好み」と冠される女だけではない。『伊勢物語』では、「つれなし」と冠される女も多く登場する。[9] 次節以降で見ていくこととする。

三、つれなき女―三十五段・五十四段・五十七段の場合―

前節までに「色好み」と冠された女が登場する章段を取り上げたが、女に冠する語として、『伊勢物語』で一番多く見られるのは、「つれなし」の語である。男をなかなか受け入れない「つれなき女」との恋においても、恋に苦しむ男の姿が描かれている。

・むかし、男、つれなかりける人のもとに、
言へばえに言はねば胸に騒がれて心ひとつに嘆くころかな
（三十四段）

・むかし、男、つれなかりける女にいひやりける。
行きやらぬ夢路をたのむ袂には天つ空なる露やおくらむ
（五十四段）

・むかし、男、人しれぬ物思ひけり。つれなき人のもとに、
恋ひわびぬ海人の刈る藻に宿るてふわれから身をもくだきつるかな
（五十七段）

「つれなし」と冠される女性とは、言葉通り冷淡な女性を意味する。男の言葉になびかず、冷たい態度をとり続ける女は、男を惹き付けてやまない存在であると言える。そんな女の許に、男は恋に苦しむ胸のうちを訴える歌を贈るのである。

三十四段では、女への思慕はたとえ口に出したとしても言い得ず、また言わなければその想いで平静さは失われてしまうこのごろだ、と胸の中に悶々ともてあます自分の気持ちを歌に詠み込んでいる。波線部で「恥ずかしげもなく詠んだのであろう」と評されるほど、この男の歌からは、「つれなき女」への恋に苦しみ嘆く男の姿がうかがえる。「つれなき女」への恋に苦しみ嘆く様子は、五十四段・五十七段にも見ることができる。

五十四段では、「行くことのできない夢路というものを頼みにする私の袖は、あなたに逢えない悲しみの涙でぬれています」[10]と、夢というはかないものを頼みにするしかない男の悲しみが詠まれている。現実世界では女に逢うことのできない、「つれなき女」との恋に苦しむ男の姿が読みとれよう。五十七段でも、男は恋に

苦しんでいる。「人知れぬ物思ひけり」と、他人にはとても分かってもらえそうもないものであると語られていることからも、男が恋に苦しんでいることは明確である。それだけではない。相手は「つれなき女」である。人知れぬ恋心を抱えていることに加え、その恋の成就しがたいことから、男は、「恋わびぬ」と、恋に疲れ果ててしまった嘆きの歌を詠んでいるのである。「つれなき女」との恋において、男は嘆き苦しみ、疲れ果ててしまう。そのような男の姿が「つれなき女」が登場する章段からうかがうことができる。

ここでとりあげた章段は短いものである。男の心情や状況の描写が見られないものの、このような章段において、「つれなき女」に訴える歌こそが、これらの章段の中心であることは言うまでもない。いずれの章段においても、歌から自分の思いを受け入れない冷淡な女との恋に苦しみ嘆く昔男の姿を確認することができる。さらに言うなれば、何とか気持ちを伝えたいと詠む三十七段、現実では逢えないと嘆く五十四段、恋に悩み、もう精も根も尽きてしまったと詠む五十七段から、気持ちを受け入れてくれない「つれなき女」に男は翻弄されていると捉えることもできよう。前節までに見た色好みの女との恋同様、「つれなき女」との恋においても、男は女に翻弄されているのである。

このように「つれなき女」との恋に嘆き、苦しむ昔男の様子からは、恋を楽しむ姿はどこにもうかがうことはできない。「つれなき女」との恋に苦しむ姿は、これらの章段だけに見られるものではない。次節で見ていくこととする。

四、つれなき女―七十五段・九十段の場合―

前節では、「つれなし」とだけ冠された女との短い章段を取り上げ、冷淡な女との恋に苦しむ男の姿を確認した。ここでは、冷淡な女が見せる情けによって、翻弄する男の姿を見ていくこととする。

まず、七十五段から見てみよう。

むかし、男、「伊勢の国に率て行きてあらむ」といひければ、女、

大淀の浜に生ふてふみるからに心はなぎぬ語らはねどもといひて、ましてつれなかりければ、男、

袖ぬれて海人の刈りほすわたつうみのみるをあふにてやまむとやする

女、

岩間より生ふるみるめしつれなくは潮干潮満ちかひもありなむ

また男、

涙にぞぬれつつしぼる世の人のつらき心は袖のしづくかよに逢ふことかたき女になむ。

この章段では、男は「あなたを伴って伊勢の国へ行き、そこで住もう」と女に言いかける。しかしながら、女は、返歌において、契りは交わしてないけれども「見る」だけで心は満足している、

とその申し出を断り、「ましてつれなかりければ」と、以前よりも冷淡な態度をとるのである。前節で取り上げたような短い章段においても、恋に苦しむ男の嘆きが描かれていたことを重ね合わせれば、「ましてつれなかりければ」と、更に冷淡な態度をとられた男の苦しみは、一層重いものと思われる。そのような苦しい胸のうちを訴え、何とか女に受け入れてもらおうとする男の歌に対し、女は、「見る」機会が続くのであれば、そのうちその甲斐も現れるでしょう、と一応は情を寄せるような返歌をする。しかし、結局は拒否の歌であるため、男は再び涙にくれるさまを女に訴える歌を詠みかけるのである。

男をこれほどまでに悲しませる女は、まさしく「つれなき女」であり、確かに「よに逢ふことかたき女」であった。しかしながら、「つれなし」が冠されるだけの前節とは対照的に、結果として男を拒否する歌ではあったけれども、この章段の女は、「かひもありなむ」と返歌に詠み込むことで一応の情けを男に示していたと言える。冷淡な女が情けを見せることによって、この章段で描かれている昔男は、前節で見たような「つれなき女」に恋の苦しみを訴える姿に加えて、女に翻弄される姿も描かれているといえる。「色好み」の女との恋とはまた違う苦しみを昔男は味わうこととなるのである。

男を翻弄する「つれなき女」は、次に挙げるように、九十段にも見ることができる。

むかし、つれなき人をいかでと思ひわたりければ、あはれとや思ひけむ、「さらばあすもの越しにても」といへりけるを、かぎりなくうれしく、また疑はしかりければ、おもしろかりける桜につけて、

さくら花今日こそかくもにほふともあな頼みがたあすの夜のこと

といふ心ばへもあるべし。

女は「つれなき」人ではあったけれども、男はずっと思い続けていた。そのような女から波線部のような「それならば明日物越しでも逢いましょう」という言葉を聞いて、限りなく嬉しいと思う一方で、また疑わしく思う男の心情が描かれている。うれしくも不安に思う男の心情は、段末の波線部に端的に示されているように、満開の桜に託された一首に詠み込まれている。前節で見たような、「つれなし」と冠される女への恋の苦しみは、この章段では描かれていない。つれなき女の情けある言葉によって翻弄された心の動揺が描かれているのである。九十段から、「つれなき女」が見せる情けに翻弄され、不安な気持ちにさいなまれる男の姿を確認することができよう。

以上、三節と四節にわたって、「つれなし」が冠された女が情けを見せる章段を取り上げてきた。三節では、まるで詞書と歌だけのような短い章段ではあったが、「つれなき女」に対する恋の苦しみ、嘆きが描かれていた。本節で見た「つれなし」と冠される女の情けが見られる章段においては、女との恋の苦しみに加えて、女に翻弄されている男の姿をも確認した。これらの「つれな

し」と冠される女との恋を描く章段においても、「色好み」と冠された女との恋同様、恋を楽しむような男の姿は見受けられない。昔男は恋に苦しみ、嘆き、そして女に翻弄される人物として描かれているのである。

おわりに

本稿では、「色好み」「つれなし」と冠される女との恋を描く章段を取り上げ、それらの女との恋において、男がどのように描かれているかを見てきた。

「色好み」と冠された女が見られる章段においては、「色好み」と知りながらも、女の魅力に取りつかれ、そんな女に翻弄される男の悲しみが描かれていた。「つれなし」が冠される章段からは、冷淡な女への恋に苦しみ嘆くさまが描かれ、また、そんな女から情けを示されると翻弄されてしまう、という男の姿が描かれていた。これらの章段に見られる「昔男」は、恋を楽しむ好色な男ではない。それどころか、むしろ逆に、「色好み」や「つれなし」と冠される女から翻弄されることにより、恋に苦しむ男が浮かび上がってくる。『伊勢物語』には、このように、女に翻弄される男の姿も描かれているのである。

このように恋に苦しむ男の姿は、宗祇・三条西家流の注釈書においても見ることができる。大谷俊太氏は「宗祇は、業平を道徳的・倫理的人間として捉えているのではない。業平は好色の人であっても構わない。宗祇にとっての業平は、あるときは恋に悶絶し、あるときは優しく憐愍する、あくまでも深切なる情愛の人である。[11]」と述べられている。それらの注釈書が捉えようとした業平像は、本稿で取り上げた男の姿と矛盾しない昔男の姿であろう。

稿者はかつて、『伊勢物語』の中核となる章段において、男の泣く姿、悲しみに収斂しようとする物語構造が共通して見られることを指摘した。[12]『伊勢物語』の昔男は、悲しむ姿に焦点があてられていることに特徴があると指摘できる。さらに、旧稿で指摘したそのような特徴に、本稿で確認した、女に翻弄され、恋に苦しみ、悲しむ男の姿を重ね合わせてみると、『伊勢物語』とは、昔男の悲しみを描く作品、と言えるのではなかろうか。

「好色」と言われた業平が、「昔男」として『伊勢物語』に描かれる際に単なる「色好み」と言われない理由の一端も、そこにあると言えよう。

注

(1) 石田穣二氏訳注『新版　伊勢物語』(角川文庫・一九七九年)、五十八段脚注。

(2) 『伊勢物語』において、昔男に「色好み」の語があまり見られないことは、今西祐一郎氏「色好み私論」(『静岡女子大学国文研究』八・一九七五年二月)においても、すでに指摘されている。

(3) 女性に冠された「色好み」としては、今関敏子氏『「色好み」の系譜　女たちのゆくえ』(世界思想社・一九九六年)、丁莉氏「「色好み」と女性」(『伊勢物語とその周縁　ジェンダーの視点から』風間書房・二〇〇六年)を挙げることができる。

(4) 片桐洋一氏『伊勢物語・大和物語』二十五段(角川書店・一九

七五年）

（5）『古今集』では「来し」、『伊勢物語』では「寝る」と、それぞれ諸本間での異同は見られない。この点からも、この歌句の違いは、『伊勢物語』に取り込まれる際の改編によるものだと判断できる。

（6）石田穣二氏『伊勢物語注釈稿』二十五段・評釈（竹林舎・二〇〇四年）

（7）山本登朗氏「伊勢物語の悪女」（『伊勢物語論　文体・主題・享受』笠間書院・二〇〇一年）

（8）注（7）に同じ。

（9）「つれなし」が冠される女が登場する章段は、三十四段・五十四段・五十七段・七十五段・九十段・百二十段の六章段。なお、百二十段は、歌の中で男は女のことを「つれなし」と言っており、他の章段と異なるので、本稿では扱わない。

（10）「夢路をたのむ」という言い方は意味の取りにくい表現である。武田本では「夢路をたどる」とあり、この男の歌は夢路においてもまどっている歌となり、現実のみならず夢においても女に逢えないなげきが詠み込まれていることとなる。天福本・武田本で異同のある箇所ではるが、実際に女に逢えない悲しみを詠む点において変わりはない。

（11）大谷俊太氏「余情と倫理と—伊勢物語旧注論余滴—」（『叙説』三十三・二〇〇六年三月）

（12）拙稿「泣く昔男—『伊勢物語』の物語構成—」（『詞林』三十六・二〇〇四年十月）

【使用テキスト】

・『今昔物語集』（新日本古典文学大系）

・『伊勢物語』（新潮日本古典集成）